

伝え残したいこと

昭和44年（1969年）8月14日、父親が松本市高宮交差点で左折大型トラックに轢かれ即死した。母親44歳、小生24歳弟22歳の四人家族。兄弟ともに脛齧り学生。一家にとってまさしく驚天動地。加害者は田中角栄が顧問を務める「日本新潟運輸」。民事・刑事裁判ともに一審を不服とした加害者が控訴し東京高裁へ。加害者側敗訴で結審した。この間母親は早く亭主の元へ行きたいと言いつつ、乳癌を患い53歳で鬼籍へ。弟も不条理な父親の死が災いし、アルコールに頼る生活が祟り肝臓がんのため両親の元へ。

父親の遭難から程なくの頃のことだったか、帰省した小生に母親がこんなことを言ったことを覚えている”「もっと酷い目にあった人がいたよ！」”。事故を知った近隣に住む見知らぬ婦人が突然訪ねて来られて、旧満州からの引き上げ道中で体験した生き地獄の模様を話して呉れたそうだ。我が一家に向けた慰めの気持ちを込めて血を吐く思いで語ったのだろう。ソ連兵に追われ逃亡する道中、乳飲み子や幼児らは母乳は出ない、食べ物はない、空腹のため泣きわめく、敵に所在を知られると機関銃の標的にされる。百人単位逃亡集団の安全のために、親達は自ら我が子を刺し殺し遺体を放置して逃避行を続けた。その夫人も二人の愛児を刺し殺し”今こうして生きている毎日も、地獄の苦しみに苛まれている”と。

2025年12月9日21時NHKラヂオ、山形県出身佐藤さん（女性86歳）が、やはり逃避行過程の地獄図を語っていた。大人達は正常心を失い、逃避の邪魔になる幼子を生きたまま淹壺へ投げ入れた。彼女の弟（1歳）も母親に投げ込まれ、絆の着物に身を包まれた弟が淹壺で見え隠れしている内に水中へ飲み込まれて行った光景を「忘れようとしても寝ても覚めても消え去らない」慟哭の毎日だと。殺すにしのびなく、置き去りにされた子供達も沢山いた。「満蒙開拓団記録」初め悲惨な記録は数多くあり、改めてここに記すまでもないこととは思う。日本軍に置き去りにされた長野県、山形県、茨城県等各地からの開拓団28万人中8万人が死亡した惨状は多くの媒体により語り継がれてきている

なかにし礼（1938～2020本名・中西禮三）の「赤い月」という小説がある。家族全員北海道から渡満し、帰国するまでの実体験を中心に綴った作者渾身の長編小説だ。一家は、造り酒屋を立ち上げ陸軍に取り入り財を成した。敗戦間際、高級軍人らとその家族はいち早くソ連軍進行、劣勢必敗情報を入手し開拓団を置き去りにし列車（軍用列車と称し）をして逃走した。中西一家も伝手を頼りに同乗して帰国することが出来た。その道中、わらわらと縋り助けを求める開拓民らを銃や刀で追い払いながら。「私は長野県開拓団520人の団長”窪田”というものです。何卒・・・」縋りつく開拓民を軍人らが蹴落とした。「せめて子供達だけでも！」「これは軍用列車だから一般人はだめだ！」。なかにし礼にとり宿痾のごとく終生の禍根として心の傷になった情景だったそうだ。この小説は降幡康男監督、常盤貴子、香川照之らにより映画化もされている。ついでながら弘田三枝子「人形の家」は、見捨てられた満州引き上げ者の心情を密かに込めていると、作詞者なかにし礼が語っている。

いち早く逃走した高級軍人らに「満州第731部隊」石井四郎中将らもいる。彼らの残酷非道な行いが「三光作戦。奪い尽くせ 殺し尽くせ、焼き尽くせ」に詳細が綴られている。中国人捕虜を生きたまま解剖（生体解剖）、捕虜を実験材料に細菌兵器・毒ガスの効力試験、血管へ空気を注入してどの程度の注入量で死亡するか（心臓からボコボコという音が派生して死亡したという記述がある）等虐殺の詳細を知ることが出来る。此等の記録は戦後米軍が入手することを条件に、関係者が戦犯に問われることを免除された。彼らは帰国後「ミドリ十字」を設立し巨万の富を手にしてきたことは周知の通り。一般給与生活者の平均年収数倍に相当する軍人恩給を手にしながらだ。因みに兵士や一般引揚者の苦難を尻目に、帰国後財を成した高級軍人らの行状は枚挙に暇がない。

保坂正康「昭和陸軍の研究」という力作がある。4000名以上に上る旧軍人の証言を元に日本軍が中国で行った虐殺行為等を纏めた貴重な記録だ。残虐極まりない目を背けたくなるような実態が詳らかに証言されている。「刀の試し切りのため一人で100人以上の首を刎ねた」「揚子江縁で連日終日機関銃で射殺した死体を、数万屯級戦艦のスクリュウを川に据え強力な水流を作り何日にもわたって流し続けた」「1937年南京大虐殺の実態」。中国側死者総数は2000万人を超えるとも。加害側は忘れても、被害側は数百年にわたり決して忘れ去ることが出来ない歴史だろう。我々が広島、長崎、東京大空襲等を忘れられないが如くに。中国を初め東南アジア侵略の正当性について縷々尤もろしく喧伝されてきているが、実態は身の程知らずの勝手な拡張主義に真因がある。我々日本人、就中政治家は片時といえども非道な加害の歴史を忘れてはならないと考える。

1945年8月8日ソ連軍の満州侵攻後約60万人の捕虜をシベリアへ抑留。鉄道敷設や炭鉱掘削のために酷寒の地で酷使。約6万人が飢えと寒さで死亡。かたや、一方的に日本軍により侵略され暴虐の限りを尽くされた中国（当時は国民党が主体、1949年からは中華人民共和国）は基本的に「恨みに報いるに徳を以てす」を旨とし、葫芦島や上海を中心に約300万人の旧軍人や民間人を保護し、順次日本へ帰国させた。保護されるまでの過程で各地で中国人による報復もあったことも伝えられてはいるが、無理からぬことだったと思う。しかし前述の満州で置き去りにされた数万人にも上るとされる多くの子供達は、現地中国人によって育てられたことも感謝しなくてはならない事実である（残留孤児）。

悠久の歴史に於いて、世界三大文明発祥の中国から我が国は多くのことを学んで来た。文字、文学、宗教、思想、科学技術等々。1894年日清戦争以来、ほぼ一方的に日本側の侵略により半世紀あまりに亘る不幸な関係が続いた。この期間はお互いの長い関係においてほんの一瞬である。1938年日清戦争では賠償金二億両（テール、当時の日本国家予算3年分 現在価値で約200兆円）を支払わせた。この戦果は”戦争は儲かるものだ”という悪しき成功体験となり、大戦への道を歩む原動力の一因になったのだろう。

1972年田中角栄、周恩来により悲願の日中国交が回復した。中国側は大戦による損害賠償を求めなかった。その後、国是の違い等による様々な齟齬が続き最近とみに先鋭化しているように見える。十億人を統治するため、現状では彼の国の事情があるのだろう。日本には日本の事情がある。お互い相手があつての付き合い。違いを認めつつ、且つ歴史を謙虚に見つめ直し出来る限り良好な関係を構築して行くことが重要課題と考える。最近責任あるべき立場の政治家らによる、一見勇ましいが誠に浅はかな言動が目に付く。縷々綴ってきた歴史の真実を知らない大半の若者ら、あるいは政治家あるいは歴史修正主義者らの多くがこれら言動に賛同しているように見受けられる。軍事費抑制、平和憲法維持を主張して来た某党が自民党と袂を分かつたことを受けて、自衛隊元最高幹部が「日本の夜明けが来た。これから思い切り軍備増強が出来る！」と高言した。現在GDP日本の4倍強、2038年には米国を抜いて世界第1位になること必至の中国。かたや2050年にはインド、インドネシア等にも遅れをとり8位から10位と予想される（IMFによる）経済小国日本が大国相手に僅かばかり（中国に比べて）の軍備増強してどうしようとするのか？この国の将来をどのような国にしようと考えているのか？戦争をして勝てると思っているのか？軍人は勝ち負けに関わらず戦争大好き。武器を手にすると使いたくなる人種。東京大空襲（1945年3月10日）を主導し、キューバ危機（1962年）でも”なんとしてもソ連と戦火を交えたい”と画策したカーティス・ルメイを彷彿とさせる。もっとも彼ら高級自衛官らは上述したが如く、いざ事が起こっても要領よく生き延び、一般自衛官や国民が犠牲になることは必定であり、これは歴史の教えるところ。

世界は益々混迷を極める中、軍備増強の愚を避け、あらためて石橋湛山による「小日本主義」、大平正芳の「田園都市構想」に倣い、叡智を結集して「新小日本主義」を模索す

るとともに科学技術・農業立国を旨としつつ、韌やかな全方位外交を目指し自立した国作りを構築することが喫緊課題と考える。 2025年12月 小松 泰彦